

証言による『南京戦史』(9)

46期 敵本 正巳



六、太平門、和平門、下関方面の戦闘と城内掃蕩

1、佐々木支隊の下関進出後の戦闘

第十六師団の最右翼である佐々木支隊(38 i. I / 33 i. 8 L P W. 野砲一大隊基幹)は、紫金山から紫金山北側を経て下関に向かい敵の退路遮断に任じたが、この間の紛戦の状況は述べたとおりであるが、12月13日下関進出後の戦闘について、『佐々木一少将の私記抄』によりその実相を述べる。

▼『佐々木一少将の私記抄』

12月13日
「支隊の第一線部隊は13日払暁、敵陣地を突破し、つづいて敵を急追した。軽装甲車中隊は午前10時頃まず下関に突進し、江岸に鋼集し、あるいは江上を逃れる敗敵を掃射して(注・1)、無慮一万五千発の弾丸を射ちつくした。

この間、歩兵第三十八聯隊は城北の五箇の城門を占領して敵の退路を絶ち、聯隊長はI / 33 i. とともに装甲車隊に追及し、西面して挾江門付近に進出して逃げ遅れた敵と戦闘を交えた。……少し遅れて第六師団の一部が南方より江岸に進出し、海軍第十一戦隊が潮江より、流下する敵の舟筏を掃射しつつ午後2時下関に到着し、国崎支隊は午後4時、対岸の浦口に進出した。その他の城壁に向った部隊は城内を掃蕩しつつある。実に理想的な包圍殲滅戦を演じたのである。

この間、わが支隊の作戦地域内に遺棄された敵屍は一万数千にのぼり、そのほか装甲車隊が江上で撃滅したもの、ならびに各部隊の俘虜を合算すれば、わが支隊のみにて二万以上の敵は殲滅されている筈である。(注・2)

午後2時頃、概ね掃蕩を終って背後を完全に、部隊をまとめつつ前進して和平門に到る。その後俘虜続々と投降しきたり、数千に達す(注・3)。激昂せる兵士は上官の制止を肯かばこそ、片っぱしから殺戮する。多数戦友の流血と10日間の辛酸を顧みれば、兵隊ならずとも「皆やってみせえ」と言いたくなる。

白米はもはや一粒もなし。俘虜に食わせぬもの持合せなんか、わが軍には無い筈だ。和平門の城壁に登って、天皇陛下の方角を三唱し奉る。中央門外に舎營。美しき寝台なれど寝具なし。兵隊が南京米を捜し出してくる。

城内に残った住民は恐らく十万余内(注・5)であろう。殆んど細民ばかりである。その中に、多数の敗残兵が混入していることは、当然と思われる。金陵大学には一千万以上の妙

鮮の婦女が収容せられ、外交部跡には敵の負傷兵數百が収容せられ、外国人医師以下の庇護下に在って治外法権らしく振舞っている。守將が逃げた後に残された支那兵程みじめな存在は無いのである。彼等に戦意の程が有りや無しやは自明の理であるが、彼等には最早退路が無かったので、死もの狂いに抵抗したのである。敗残兵といえどもなお山岡・都落に潜伏して狙撃をつづけるものがあった。従って抵抗するもの従順の態度を失するものは、容赦なく即座に殺戮した。終日、各所に銃声が聞えた。

太平門外の大きな外濠が死骸で埋められてゆく。空屋の中は殆んど掻き乱され、かつ軍装品が散らばっていた。手榴弾や小銃弾は到るところに投げ捨てられている。加うるに要所には地雷が埋設されているので危険の上もない。

城内の大通りはすべて、陣内戦と防空を目的に大工事が施され、機関部を壊しあるいは焼かれた自動車、列をなして捨てられ、その間に被服・器材が散らばり、落花狼藉をきわめている。国民政府、軍官学校その他の軍施設は、わが空爆のために完膚なきまでにヤッつけられていた。城外飛行場また然り。骸骨となった家屋の焼跡や、今なお火勢を煽っている各所の火災、住民や、今も顔を見せない。瘦せただけが無表情に歩いたり、寝そべったりしているのである。

下関の自買の通りは殆んど全部焼け落ちていた。バンドは數百の自動車、乗車して、數百の死骸が一つ一つ岸から流れてゆく。

民國16年2月、国民革命軍が南京に入城して以来正に10年、當時城内の人口三十万から八十万が増加し、農民を擲取して、ここに見て呉れがしの近代都市を建設することに成功した。だが今や、楳花一朝の夢と化した、この破壊された首都の惨状を見て、誰か感慨なからんやだ。

12月15日
わが第十六師団の入城式を挙行す。師団が将来城内の警備に当るのだという者がある。終って冷酒乾杯。

各師団その他、種々雑多な各部隊が既に入城しては、街頭に先にも言った如く兵隊で溢れ、特務兵なんかにはわがわが服装の者が多い。戦闘後、軍紀風紀の頹落を防ぐため指揮官がしつかりしないと、憂うべき事故が頻発する。

城内において、百万袋以上の南京米を押収する。この米のある間は後方から精米は補給しないと言ふ。聊か頼だが仕方がない。因みに南京米はポロポロで、飯盒の中から箸では掬えない。

12月16日
命により紫金山北側一帯の地域を掃蕩す。獲物少しとはいへ、兩聯隊とも數百の敗兵を引摺り出して処分した。市民はポツポツ街に現われる。

12月17日
中支那方面軍の入城を挙行せらる。

12月18日
陸海軍合同慰靈祭を城内練兵場で執行。陸海兩最高指揮官の祭文は、側々として將兵の肺腑に通り、満場ただ寂々たるのみ。(ゴックン筆)

(筆者注・1)
一、戦隊の「保津」「勢多」も下関沖で逃走する。中国兵を掃射しては「歩兵第三十三聯隊戦闘詳報」によると「江上で殲滅した敵は二千を下らず」と述べている(後掲)。昔問「江上を小舟、筏で雲霞の如く逃走する敵を掃射し、無慮五万人を虐殺」と称するが、いかなるものであろう。
(注・2) 佐々木支隊の作戦地域内の遺棄死体一万數千、敵に与えた損害合計二万以上というが、13日、佐々木支隊は紛戦を交えつつ下関に突進したのであるから、遺棄死体や俘虜数を正確に調べる余裕はなかったと思われる。
ただし、「33 i. 戦闘詳報」(後出)には遺棄死体五、五〇〇(敗残兵の処理を舎じ)、俘虜三、〇九六と誌されている。

当時、この方面の中国軍は第三六師であり、前線からの退却部隊を合算しても三三師以内、一〇師の兵力五千人が半減して、たとすれば、総力七、八千人と見積もられる。佐々木私記や33の戦闘詳報の数字は過大であらう。

は下関に進出した。当時、南京城に拠つて最後の抵抗を試みた中国軍は総崩れとなり、下関方面に退路を求めて混乱の極に陥つていた。

右側には城壁上より数本のロープが吊り下がつている。最後まで抵抗した中国兵は、このロープによりすがり脱出して、揚子江に向かつて逃走したのであらう。

（注・3）「俘虜数千に達し、片っぱしから殺戮す」とあるが、「33の戦闘詳報」による「二二、〇九六は処断す」とある。この俘虜を指すものかも知れないが、平井秋雄氏（後出）は、こんな多数の俘虜を捕えたこととはない」と述懐している。

（注・4）14日の城内掃蕩については、33兵、39の「戦闘詳報」からは、少数の敗残兵、投降兵はあったようであるが、このような状況は窺えない。

城門が外側から閉塞されていることは、城内からの脱出を防いだものである。城内から脱出するために、このロープに頼るしかないから、老幼婦女などとは到底脱出はできなかったと思われる。

（注・5）残留市民十万余、金陵大学、外交部跡の状況は、他の証言と一致する。

この時、中国兵の揚子江上を浮遊物に取りすがって逃走中の姿が望見されたので、聯隊命令をもって重火器の火力を集中して、約一時間余。私も江岸に行つてこの状況を見た。

◆田島勝己氏の遺稿（第二機関銃中隊長、38期）私の部隊は、紫金山麓から玄武湖畔の太平門を経て、城壁沿いに和平門に向かった。紫金山攻撃の際、松井軍司令官から「中山陵を破壊してはならない」という命令があったので、野砲を撃ち込むことなく、ほとんど小銃と機関銃のみの戦いであった。

「佐々木少将の私記抄」は戦場の実態を描写した貴重な資料であるが、虐殺論者は、何ら考証を加えず、これを引用している。他の公的資料や参戦者の証言等と比較考証すると、誇張や虚測、伝聞を相当に交え、そのまま鵜呑みにするわけには行かない。

この江上を逃走した敵中に一般住民の混入など、とても考えられない。その数は千〜二千ぐらいであつたらうか。

◆田島勝己氏の遺稿（第二機関銃中隊長、38期）私の部隊は、紫金山麓から玄武湖畔の太平門を経て、城壁沿いに和平門に向かった。紫金山攻撃の際、松井軍司令官から「中山陵を破壊してはならない」という命令があったので、野砲を撃ち込むことなく、ほとんど小銃と機関銃のみの戦いであった。

2、歩兵第三十三聯隊の戦闘と城内掃蕩（同聯隊史・戦闘詳報による）

この時、中国兵の揚子江上を浮遊物に取りすがって逃走中の姿が望見されたので、聯隊命令をもって重火器の火力を集中して、約一時間余。私も江岸に行つてこの状況を見た。

◆田島勝己氏の遺稿（第二機関銃中隊長、38期）私の部隊は、紫金山麓から玄武湖畔の太平門を経て、城壁沿いに和平門に向かった。紫金山攻撃の際、松井軍司令官から「中山陵を破壊してはならない」という命令があったので、野砲を撃ち込むことなく、ほとんど小銃と機関銃のみの戦いであった。

12月12日、紫金山の山頂を占領した歩兵第三十三聯隊（野田部隊）は、13日午前9時すぎ十六師作命甲第一七一号により、「一部をもって太平門を準備せしめ、主力は下関方向に前進して敵の退路を遮断すべき」命令を受領した。

この頃、海軍の揚子江艦隊が航行してきて、艦砲をもって射撃を始めたので、聯隊は海軍艦艇に危害を与えることを考え、射撃を中止した。

◆田島勝己氏の遺稿（第二機関銃中隊長、38期）私の部隊は、紫金山麓から玄武湖畔の太平門を経て、城壁沿いに和平門に向かった。紫金山攻撃の際、松井軍司令官から「中山陵を破壊してはならない」という命令があったので、野砲を撃ち込むことなく、ほとんど小銃と機関銃のみの戦いであった。

13日午前10時頃、第六中隊（機関銃一小隊、工兵一小隊配属）を太平門守備に残置し、第二大隊（一中隊欠）を前衛として、天台北側の道路を駆けくだり、太平門と和平門と下関道を下関に向かい突進した。また、右側支隊（佐々木少将指揮）に配属された1/33は、13日午前8時頃、紅山を占領し、浮き足立った敵を急追して、午後1時すぎに

この時、中国兵の揚子江上を浮遊物に取りすがって逃走中の姿が望見されたので、聯隊命令をもって重火器の火力を集中して、約一時間余。私も江岸に行つてこの状況を見た。

◆田島勝己氏の遺稿（第二機関銃中隊長、38期）私の部隊は、紫金山麓から玄武湖畔の太平門を経て、城壁沿いに和平門に向かった。紫金山攻撃の際、松井軍司令官から「中山陵を破壊してはならない」という命令があったので、野砲を撃ち込むことなく、ほとんど小銃と機関銃のみの戦いであった。

下関は南京城西北方の揚子江岸の渡船場で、交通の要衝として繁華な街並みであつたが、戦闘により見る影もなく破壊しつくされた。

この時、中国兵の揚子江上を浮遊物に取りすがって逃走中の姿が望見されたので、聯隊命令をもって重火器の火力を集中して、約一時間余。私も江岸に行つてこの状況を見た。

◆田島勝己氏の遺稿（第二機関銃中隊長、38期）私の部隊は、紫金山麓から玄武湖畔の太平門を経て、城壁沿いに和平門に向かった。紫金山攻撃の際、松井軍司令官から「中山陵を破壊してはならない」という命令があったので、野砲を撃ち込むことなく、ほとんど小銃と機関銃のみの戦いであった。

13日夜、この鹿城にひとしい町中に露営した聯隊は、翌14日から、第二大隊をもって城内の西北角一帯を、第一、第三大隊をもって下関地区の掃蕩を開始した。中国軍の大半は、逃走したが、まだ相等数の敗残兵が潜伏してあり、この掃蕩はまことに厄介なものであつた。

この時、中国兵の揚子江上を浮遊物に取りすがって逃走中の姿が望見されたので、聯隊命令をもって重火器の火力を集中して、約一時間余。私も江岸に行つてこの状況を見た。

◆田島勝己氏の遺稿（第二機関銃中隊長、38期）私の部隊は、紫金山麓から玄武湖畔の太平門を経て、城壁沿いに和平門に向かった。紫金山攻撃の際、松井軍司令官から「中山陵を破壊してはならない」という命令があったので、野砲を撃ち込むことなく、ほとんど小銃と機関銃のみの戦いであった。

城内の西北隅、獅子山砲台に立て籠つて最後まで抵抗した中国兵の一部は、逃げおくれ、ついに武器を捨てて投降しはじめ、その数二、三百人に達した。

この時、中国兵の揚子江上を浮遊物に取りすがって逃走中の姿が望見されたので、聯隊命令をもって重火器の火力を集中して、約一時間余。私も江岸に行つてこの状況を見た。

◆田島勝己氏の遺稿（第二機関銃中隊長、38期）私の部隊は、紫金山麓から玄武湖畔の太平門を経て、城壁沿いに和平門に向かった。紫金山攻撃の際、松井軍司令官から「中山陵を破壊してはならない」という命令があったので、野砲を撃ち込むことなく、ほとんど小銃と機関銃のみの戦いであった。

12月14日の行動——

この時、中国兵の揚子江上を浮遊物に取りすがって逃走中の姿が望見されたので、聯隊命令をもって重火器の火力を集中して、約一時間余。私も江岸に行つてこの状況を見た。

◆田島勝己氏の遺稿（第二機関銃中隊長、38期）私の部隊は、紫金山麓から玄武湖畔の太平門を経て、城壁沿いに和平門に向かった。紫金山攻撃の際、松井軍司令官から「中山陵を破壊してはならない」という命令があったので、野砲を撃ち込むことなく、ほとんど小銃と機関銃のみの戦いであった。

◆羽田武夫氏の証言(歩兵第三十三聯隊機関銃中隊一等兵、現住所和歌山市東小二里町四一五)

紫金山占領、下関に突進
12月10日午後1時30分、命によりわが部隊は、紫金山要塞に向かって攻撃を開始しました。守るは軍官学校教導隊の約一ヶ旅団の精鋭です。何しろ山の上のことですから一ヶ中隊(約百五十人)くらいしか同時に行動できません。紫金山といつても頂上までには幾つもの峯があり、第一峯は二七メートル、第二峯二八二メートル、第三峯三八六メートル、頂上の第四峯は四八八メートル。これを白兵戦で攻め登るのです。塹壕の中は戦死者で埋まり、死闘につぐ死闘を余儀なくされ、わが方も多数の戦死傷者を出しました。

かくして三日三晩の戦闘の末、12月12日の夕闇迫るころ、最高峯の四八八高地は遂にわが軍の手に帰りました。
一夜を山中で露営したわが部隊は、13日早朝、山頂から天文台沿いに紫金山を下りました。そして太平門を過ぎ城壁の東側、玄武湖を経て、和平門―下関道を、敵を掃蕩しつつ下関に突進しました。

この夜、下関地区で野営したが、いわゆる商社街で二、三階建の〇〇公司とか△△洋行といった建物がある割り合い広い道路の繁華街であった。しかし、建物の多くは戦火によって崩れ落ちていました。
14日の掃蕩行動――
14日は聯隊命令により、城内西北一帯の掃蕩を命ぜられ、挾江門および西北隅の獅子山砲台を掃蕩しました。

城内進入は挾江門の脇の門から入ったと思えますが、挾江門は土壁でギョッリと固められており、城門の道路両側には点々と死体があつたと記憶しています。城壁にはたしか十五、六本の色々の布切れの吊が垂れ下がつておりました。私は大隊本部と共に行動するのが任務でしたので、中隊毎の掃蕩がほぼ終了した時点で、本部とともに前進したので、挾江門前の広場には約三百人と推定され

る死体が、割り合いに広範囲に散らばつていたことをはっきりと記憶しています。
この死体は、城壁からころがり落ちた者、あるいは慌てて跳び下りたのではないでしょう。逃げ場を失つた中国兵が、狼狽のあげく布を伝つて降りたものと想像されます。

この日、第二大隊は挾江門付近から獅子山砲台にわたり、抵抗する散兵と交戦して敵の遺棄死体約三百、投降した便衣兵約二百の戦果をあげました。
――中略――

わたくし達は14日夕刻、城内に入り、中山北路以東の敵を掃蕩しつつ、集結地である市役所まで行軍しました。
市内には殆ど死体を見ず、ほんとうに静かなものでした。
――その後――
その後約二ヶ月、私たちの部隊は警備の任につきましたが、まことに平穏な日々でした。南京攻略戦で一番多くの死傷者を出したのは、下関地区の挟撃戦であつたと思ひます。これは戦闘です。

私の所属した中隊――中隊は五回も補充を受けましたが――には一人として不真面目な兵隊はいませんでした。敵しい軍律の下で二年間の訓練を受けた現役兵で編成された師団です。その兵隊たちが、東京裁判でいわれたような、平和がよみがえつた南京市内で放火、略奪、強姦、虐殺……「悪魔の宴會」を六週間も続ける……ことなど、あり得ようはずがありません。(ゴジック・筆者)

◆12月10、14日 彼我の損害戦果
『歩兵第三十三聯隊戦闘詳報』(による)

わが軍の死傷者、将校八、下士官兵一九六
射耗弾、小銃四一、〇五一発、機関銃二、
四九〇発、擲弾筒、三四八発、手
榴弾二七七発、拳銃一九三発、大
隊砲彈一三五発、速射砲彈二二五
発、聯隊砲彈二二七発

敵の遺棄死体、10日、二〇〇、11日三七
〇、12日七四〇、13日五、五〇〇
(ただし散兵兵の処断を含む)。
敵獲兵器、小銃一、四四〇、軽機八二、重
機一四、銃剣一、〇三〇、十五種

重砲八、要塞砲二、高射砲一、
高射機関銃一、速射砲三、山砲二
迫撃砲六、弾薬多数、
俘虜、將校一四、下士官兵三、〇八二、計
三、〇九六(俘虜は処断す)
(筆者注)

①、33日戦闘詳報によると、13日の遺棄死体
五五〇〇の中には「散兵兵の処断を含む」
とある。この日は下関に向かう退路遮断の
戦闘であつたから、前衛であつた島田勝見
氏、羽田武夫氏の証言のように、追撃戦闘
間に散兵兵を射殺したことは事実であろ
う。ただし、その数字は正確でない。
平井秋雄氏は、「戦闘詳報の五、五〇〇
は、揚子江岸の遺棄屍体をも含めた数であ
らう。恐らく当時各大・中隊よりの報告を
集計した推定人数と思う」と述べている。

②、俘虜三、〇九六は、將校・下士官兵に区
分されているので、捕えてから調べたもの
であらうかと思ひ、聯隊本部通信班長の平
井秋雄氏および第二大隊副官の堤千里氏に
尋ねた。
また、この俘虜が14日に生じたとする
ば「45」聯隊史」成友大隊長(前出)の
記の「約五、六千の俘虜を後続の16Dの部
隊に引き渡した」という俘虜に
あつた。当しいかと思ひ、再度問ひ合わせた。

③、両氏は、よく調べてみたが、「太平門
和平門付近の追撃間に散兵兵を射殺したが、
俘虜は獅子山砲台掃蕩間の約二百だけと聞
いている。各隊が捕えた俘虜があつたとし
全部で数百であり、三千という数字は誇大
である。また、45から五千という大量の俘虜
を受け取つた事実はない」と強く否定された。

3、歩兵第三十八聯隊の城内掃蕩
(12月14日の「戦闘詳報」)

12月14日、歩兵第三十三聯隊を併せ指揮し
た旅団司令部は、中央門外に位置して
いたが、歩兵第三十八聯隊は遠く下関に進出
して、
おり連絡がやや不便の状態であつた。
同日早朝、南京城内の掃蕩を徹底的に実
施するため、次のような旅団命令を下達し
た。歩兵第三十旅団命令および歩兵第三十八
聯隊戦闘詳報により、12月14日の城内掃蕩の
状況を概観することとする。

一、歩兵第三十旅団命令と當時の状況
歩兵第三十旅団命令 2月14日午前4時
50分 於中央門外
ヲ有スルモノ散在ス

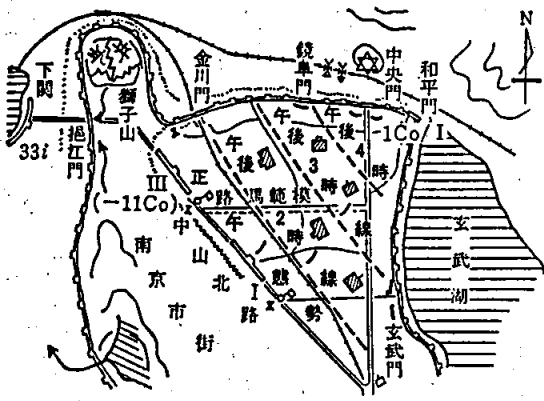
二、敵ハ全面的ニ敗北セルモ尚抵抗ノ意志
ヲ有スルモノ散在ス
三、歩兵第三十三聯隊ハ金川門(含ム)以
西ノ城門ヲ守備シ、下関及北極閣ヲ東
西ニ連ナル線及ビ城内中央ヨリ獅子山ニ
通ズル道路(含ム)城内三角地帯ヲ掃蕩
シ、支那兵ヲ掃蕩スベシ

四、歩兵第三十八聯隊(第二大隊欠)ハ金
川門(含マズ)以東ノ城門ヲ守備シ、歩
兵第三十三聯隊掃蕩区域以東ノ城内及ビ
和平門、中央大学農林ヲ連ナル線以西地
区ヲ掃蕩シ、支那兵ヲ撃滅スベシ
五、歩兵第三十八聯隊第二大隊ハ玄武湖及
ビ紫金山ノ中間ニアル山岳地帯(コレヲ
含ム以北ノ地区)ヲ掃蕩シ、支那兵ヲ撃
滅スベシ

六、各隊ハ師団ノ指示アル迄俘虜ヲ受付ク
ルヲ許サズ

七、野砲兵第一大隊ハ和平門北側附近ニ在
リテ、烏龍山砲台方面ニ於テ駐止セラル
ルト思ハレル敵ノ兵団ニ対シ、適時射撃
シ得ル如ク陣地ヲ選定シ、ソノ準備ニ在
ルベシ
八、独立軽装甲車第八中隊ハソノ一小隊ヲ
速カニ湯水鎮ニ到ラシメ、軍司令官ノ直
轄タラシメ、爾余ハ中央門附近ニ集結シ
テ後命ヲ待ツベシ

南京城掃蕩戰經過要図 (12月14日)



九、追撃砲隊ハ現在地ニ在リテ待機スベシ、
 十、工兵小隊ハ予備隊トナリ中央門外ニ位置スベシ
 十一、余ハ中央門外ニ在リ
 支隊長 佐々木少将
 △戦闘ニ影響ヲ及シタル気象及ビ地形等ノ状況▽
 1、日出時刻ハ概ネ午前7時ニシテ快晴、気温ハ日中ハ温暖、夜間モ亦星明アリ
 2、地形及ビ住民
 南京城内ニハ避難民相当多数アリタルモ、コレ等ハ一地区ニ集合避難シアリテ、掃蕩地区ニハ住民殆ド無シ
 彼我ノ兵力ソノ他ト状況
 1、敵ハ統制ノ下ニ我ト交戦ノ意図ヲ有スルガ如キモノ無キガ、敗残潜在スル数ハ少クモ五、六千名ヲ下ラス
 2、我ノ兵力ハ第二大隊及ビ聯隊砲中隊、速射砲中隊
 3、交戦セシ敵ノ団体号ハ第三十六師ノ一

(一)敵ハ全面的ニ敗北セルモ尚抵抗ノ意志ヲ有スル者散在ス
 旅団ハ14日、南京北部城内及ビ城外ヲ徹底底ノ掃蕩ス、歩兵第三十三聯隊ハ獅子山砲台、中山路中央三叉路以西地区及ビ下関ヲ掃蕩ス
 (二)歩兵第三十八聯隊(第二大隊欠)ハ和平門一金川門一中山門(含マズ)ト中央門トノ大通リ交又点一水閣(水閣カ)ノ地区内ヲ掃蕩シ、支那兵ヲ撃滅セントス、第二大隊ハ玄武湖以東、紫金山ニ至ル間ヲ掃蕩スル筈
 (三)第一大隊ハ右掃蕩隊、第三大隊ハ左掃蕩隊トス
 兩大隊掃蕩区域ノ境界ハ模範馬路、中央門南北ノ大通リヲ連スル線トス、線上ハ左大隊ニ属ス
 (四)兩掃蕩隊ハ午前10時中山路ノ線ニ準備スベシ
 午前10時マデニ第一中隊ヨリ鐘阜門(中央門西方一杆)一玄武門一水閣一北極閣及ビ中央門通り、中山路トノ三叉路附近ノ要点ヲ一部ヲ以テ占領スルヲ要ス
 (五)掃蕩經過ノ概要次ノ如シ
 (1)中山路通り出発ハ午前10時30分トス、ソノ東方鉄道線路(南京鐵路)、百年亭(北極閣東方約八杆)ノ線ニテ概ネ午前11時30分、鐘阜門一玄武門西ヲ連スル線、午後0時30分
 (2)中央門西南方高地ヲ東北ニ至ル線、概

部並ニ教導隊及ビ清涼山砲台守備隊ノ敗残兵ナルガ如シ
 各時機ニ於ケル戦闘經過
 1、掃蕩經過ノ概要別紙要図ノ如シ
 二、歩兵第三十八聯隊ノ掃蕩行動
 聯隊ハ午前9時、左記掃蕩命令ヲ下シ、午前10時展開線ニ就カントセンモ、途中金川門ノノ他ニ障礙物多ク行進渋滞シ、午前11時ニ至リ予定ノ線ニ展開ス
 歩兵第三十八聯隊命令 12月14日午前9時 於下関
 (一)敵ハ全面的ニ敗北セルモ尚抵抗ノ意志ヲ有スル者散在ス
 旅団ハ14日、南京北部城内及ビ城外ヲ徹底底ノ掃蕩ス、歩兵第三十三聯隊ハ獅子山砲台、中山路中央三叉路以西地区及ビ下関ヲ掃蕩ス
 (二)歩兵第三十八聯隊(第二大隊欠)ハ和平門一金川門一中山門(含マズ)ト中央門トノ大通リ交又点一水閣(水閣カ)ノ地区内ヲ掃蕩シ、支那兵ヲ撃滅セントス、第二大隊ハ玄武湖以東、紫金山ニ至ル間ヲ掃蕩スル筈
 (三)第一大隊ハ右掃蕩隊、第三大隊ハ左掃蕩隊トス
 兩大隊掃蕩区域ノ境界ハ模範馬路、中央門南北ノ大通リヲ連スル線トス、線上ハ左大隊ニ属ス
 (四)兩掃蕩隊ハ午前10時中山路ノ線ニ準備スベシ
 午前10時マデニ第一中隊ヨリ鐘阜門(中央門西方一杆)一玄武門一水閣一北極閣及ビ中央門通り、中山路トノ三叉路附近ノ要点ヲ一部ヲ以テ占領スルヲ要ス
 (五)掃蕩經過ノ概要次ノ如シ
 (1)中山路通り出発ハ午前10時30分トス、ソノ東方鉄道線路(南京鐵路)、百年亭(北極閣東方約八杆)ノ線ニテ概ネ午前11時30分、鐘阜門一玄武門西ヲ連スル線、午後0時30分
 (2)中央門西南方高地ヲ東北ニ至ル線、概

備考	計	種類		戦		利	
		存	廃	銃	砲銃	銃	敵ノ秘
一、俘虜七、二〇〇名ハ第十中隊兼化門附近ヲ守備スヘキ命ヲ受ケ同地ニ在リシガ、十四日午前八時三十分頃數千名ノ敵白旗ヲ掲ゲテ前進シ来リ午後一時武裝ヲ解除シ南京ニ護送セシモノヲ示ス	七	〇	七	〇	〇	〇	〇
二、敵ノ秘密書類一包ハ地圖其他ノ秘密ニ属スルモノナリ	一	〇	一	〇	〇	〇	〇
聯隊本部	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
第一大隊	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
第三大隊	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
歩兵砲中隊	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
速射砲中隊	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
計	七	〇	七	〇	〇	〇	〇

戦闘詳報第一二号附表
 十二年十二月十四日 南京城内戦闘詳報發獲表
 午後1時30分
 (3)ソノ以北、和平門ニ至ル、午後2時、
 (4)午後三時掃蕩ヲ終レバ、第一大隊ハ和平門附近ニ、第三大隊ハ中央門附近ニ兵力ヲ集結スベシ
 (5)歩兵砲中隊ハ中央門北側高地ニ午前10時30分迄ニ陣地ヲ占領シ、城外ニ脱出スル敵ヲ撃滅スベシ
 (6)通信班ハ第一大隊、第三大隊・聯隊本部間ニ、電話連絡ヲ午前10時30分ニ完了スベシ
 (7)ソノ他(速射砲中隊及ビ各隊小行李ノ車輛ニシテ市内ニ持入りデキナイモノ)ハ、速射砲中隊長ノ区署ヲ以テ中央門外ニヨリ待機スベシ
 第三大隊ヨリ歩兵二分隊ヲ掩護部隊トシテ派遣スベシ
 (8)第四中隊ノ一小隊ハ予備隊トス、金川門ニ位置スベシ
 (9)余ハ先ヅ金川門ニ至ル
 聯隊本部ヲ以テ和平門、中央門ヲ守備シ、主力ヲモッタ宿营地ニ露営スルタメ、左側支隊命令 12月14日午後1時0分 於南京中央門外・司令部
 軍(師団)ト海軍トノ連絡ノタメ、本日午後5時迄ニ左ノ如ク電話ヲ架設スベシ
 旅団一歩兵第三十八聯隊(昨夜ノ位置)
 歩兵第三十八聯隊一軍艦「野多」、歩兵第三十三聯隊(但シ、軍艦野多ハ備地京滬棧橋)
 午後5時30分掃蕩ヲ完了ス、ソノ結果ハ附表第二ノ如シ
 聯隊長 助川大佐

ノ命令ヲ達ス

步兵第三十八聯隊命令

12月14日午後9時30分 於下関

時30分

於下関

この両地区は、南京城防禦の重点地区の後方陣地帯にして、第一線の支拂と收容の任務を負担したことが明らかなり。したがって、第一線部隊の衛生機関等が在りしは疑うの余地なく、自然に死者の処理多かりしなるべし。殊に、太平門、富貴山間は、わが方に遮蔽せる谷地にして、死傷多かりし紫金山陣地の收容には、位置ならびに地形上最も好適なりしのみならず、富貴山には、平時より完全なる大防空設備完成せられ、後方陣地の任務を備え居たり。

命令受領後、揚子江を見たので挾江門を経て下関に出ようとしたところ、水師府といふ瀟湘な建物があった。日本軍の海軍省か鎮守府司令部にあたるのである。付近の丘の斜面に「仁・義・礼・智・信」と書いた大きな看板があったことを覚えていた。

石松政敏氏の証言 (第二野戦高射砲兵司令部副官、現住所、千葉県流山市東深井九四八—一〇)

一、敗走セル敵ハ尚残留シアリ
二、聯隊(第二大隊欠)ハ一部ヲ以ッテ要
三、第一中隊ハ和平門及ビ中央門ノ守備ニ
任ズベシ、特ニ支那人ヲ一切出入セシム
ベカラズ
四、各隊ハ該設置者ノ指示セル処ニ從ヒ村
落露營スベシ
五、露營司令官ハ竹内中佐トス
六、今夜ノ給養ハ携帶スルモノヲ使用スベ
シ、第三大隊ハ聯隊砲ヲ給養ヲ担任スル
モノトス
七、衛生隊ハ中央門外ニ糞所ヲ開設シテ
リ、又第三野戦病院ハ城内中央医院ニ在
ル
八、余ハ露營地ノ略々中央ニ在リ、午後11
時30分、命令受領者ヲ差出スベシ
聯隊長 助川大佐

三、戦闘後ニ於ケル彼我形勢ノ概要
敵ハ全ク殲滅セシマモッテ、我ハ掃蕩後、
再び下関ニ至リ露營セリ
四、餓餓過失其ノ他、将来ノ参考トナルベキ
事項
旅団命令ニヨル掃蕩区域内ノ掃蕩ヲ実施セ
シニ、既ニ步兵第二十聯隊ノ一部ヲ以ッテ
掃蕩ヲ終レル区域アリタリ
本掃蕩間、功績顕著者ナル者ナシ
五、本掃蕩ニ於テ、南京鉄道部内ニ在リシ敵
ノ第五十二師參謀長「孟化一」ノ作戦室ニ
於テ、押取セシ敵ノ防禦陣地配備要図(五
万分ノ一)地圖ヲ縮小複製シタルモノヲ別
紙ノ通リ添付ス

中沢三夫氏の述懐(第十六師団參謀長)

太平門—富貴山地区の遺棄死体—

紅土桶—北極門の遺棄死体—

地点未詳なるも、北極門は北極閣の北方な
らんと思像して左の事実を挙げん
入城時、外交部の建物内には、外国人指導
下ニ大兵站病院が開設せられあり。数千をも
って算する多数の患者を擁し、重傷者多し。
日々、三、四十名落命しつつありたり。これ
らの処理を、運搬具乏しき当時、いかにせし
やは甚だ疑問にして、付近に埋葬せられたる
こと確実なり。

なお、外国人の日記によれば、11月下旬、
南京は遠く前線の死傷者を收容し、「南京は
遠く前線の死傷者を收容し、「南京は戦死傷
者の收容所として、全市に医薬の香瀾漫し、
移転後の政府機関は勿論、私人の邸宅まで強
制的に病室にあてられた」状態にして、これ
らより生ずる死者また尠からず。

市内において埋葬せられたるは明らかなり。

藤田清氏の証言(独立軽装甲車第二中隊・
曹長)

挾江門—下関の状況

15日であったと思うが、中華門が通れるよ
うになって、命令受領のためサイドカーに乗
って、首都飯店の軍司令部に行きました。首
都飯店は高級司令部跡らしく、彼等が周章狼
狽して逃走した跡が歴然としていた。

重要極秘書類が散乱し、「蔣中正」贈と銘
記した海軍少尉任官の短剣、日本の雄刀のよ
うなもの、第二司令官の刺印のある公印など
が投げ捨てられていた。しかし、付近には死
体らしいものを見なかった。

命令受領後、揚子江を見たので挾江門を
経て下関に出ようとしたところ、水師府とい
ふ瀟湘な建物があった。日本軍の海軍省か鎮
守府司令部にあたるのである。付近の丘の大
きな看板があったことを覚えていた。

挾江門をくぐって下関に出たら、この付近
は全くの焼野原で死屍累々、戦場掃除が既に
始まっており、道路は片づけられて通行に支
障なかった。死体を揚子江の中流に運んで水
葬するらしい。寒かったが、腐乱して死臭を
発しているものがあったから、相当以前に死
んだものであると思った。

私は死体を数千と見たが、舟艇で運んで
いた工兵に尋ねると、全部終わるまでには十
五日ぐらいかかるだろうと言っていた。恐ら
く、対岸の浦口に逃げようとして下関に集ま
ったものであるが、中には民間人の服装を
したのも混っていた。

また、挾江門から城内の道路両側には塹壕
が掘られていて、戦死体を散見したが、多数
ではなかった。

(筆者注) 藤田氏に「死体を運んでいた
舟艇の種類、收容積載能力、隻数」につい
て再度お尋ねしたところ、「微塵した民船
であり、見たのは二隻であった。收容積載
能力については、当時余り関心がなかった
ので不明」との回答であった。

一隻の積載能力が不明であるが、仮りに
五十体を積み込んだとしても、江上遠く運
んで水葬することは午前・午後各一回ぐら
いの作業と仮定すれば、一日約二百体、十
五日間では約三千体処理という計算になる。
藤田氏は約千と述懐しているが、当時の上
海派遣軍參謀、橋原主計氏によると、各方
面の屍体を下関に集めたことであるから、
相当多数の屍体があったものと推定され
る。

西大門(太平門)外の
死体について—
西大門という呼称がよくわからないが、も
し、紫金山の天文台へ通ずる門とすれば、太
平門ではないかと思う。太平門には深い壕や
地隙があるので、地形上からみて状況が合致
するよう思う。

「二千の虐殺死体」とかいわれております
が、門の外側で見ましたのは千にも足らな
かと思えます。一部の死体は人に踏みつけ
られて、気の毒な状態でしたが、この人達
は、紫金山の戦闘に敗れて城内に逃げ込ま
したか、あるいは、城内から脱出しよう
としたかは判らないが、太平門まで来てや
られたのではありますまいか。

ここには、門外に深い大きな壕があり、こ
の壕の中に死体が入れられて、土で覆われ
ていました。門の正面で城壁の曲折部の下方
には、一〇〇近い死体が土もかけずにあり
ました。これは爆弾を投げられたようでした。
この状況から見まして、戦闘行為による死
者であると思えます。門の入口に立っている
歩哨に尋ねましたが、この戦闘に参加して
いないので判らない」と言いました。

鶏鳴寺の防空要塞—
鶏鳴寺は太平門と玄武門の間にある城内
の台地にあるお寺である。南京入城直後、敵
の高射砲陣地が、この鶏鳴寺高地にあること

石松氏は明治34年生まれ、大正
10年徴兵として朝鮮龍山の野砲兵第二十六
聯隊に入隊後、陸軍士官学校課程を終了
し、南京戦當時は、第二野戦高射砲兵司令
部副官として、同地の防空に任じていた。
石松氏からは多数の資料・手記をいただ
いたが、関係部分を掲載する。高射砲隊は
小部隊が広い地域に分散配置されており、
同副官は各隊を巡視している関係上、戦闘
後の全般の状況を知る資料になると考え
る。

太平門—富貴山地区の遺棄死体—

紅土桶—北極門の遺棄死体—

太平門—富貴山地区の遺棄死体—

紅土桶—北極門の遺棄死体—

紅土桶—北極門の遺棄死体—

紅土桶—北極門の遺棄死体—

紅土桶—北極門の遺棄死体—

紅土桶—北極門の遺棄死体—

紅土桶—北極門の遺棄死体—

紅土桶—北極門の遺棄死体—

紅土桶—北極門の遺棄死体—

紅土桶—北極門の遺棄死体—

紅土桶—北極門の遺棄死体—

紅土桶—北極門の遺棄死体—

紅土桶—北極門の遺棄死体—

紅土桶—北極門の遺棄死体—

紅土桶—北極門の遺棄死体—

紅土桶—北極門の遺棄死体—

紅土桶—北極門の遺棄死体—

紅土桶—北極門の遺棄死体—

紅土桶—北極門の遺棄死体—

紅土桶—北極門の遺棄死体—

紅土桶—北極門の遺棄死体—

紅土桶—北極門の遺棄死体—

紅土桶—北極門の遺棄死体—

紅土桶—北極門の遺棄死体—

紅土桶—北極門の遺棄死体—

紅土桶—北極門の遺棄死体—

紅土桶—北極門の遺棄死体—

紅土桶—北極門の遺棄死体—

紅土桶—北極門の遺棄死体—

紅土桶—北極門の遺棄死体—

紅土桶—北極門の遺棄死体—

紅土桶—北極門の遺棄死体—

紅土桶—北極門の遺棄死体—

紅土桶—北極門の遺棄死体—

紅土桶—北極門の遺棄死体—

紅土桶—北極門の遺棄死体—

紅土桶—北極門の遺棄死体—

紅土桶—北極門の遺棄死体—

紅土桶—北極門の遺棄死体—

紅土桶—北極門の遺棄死体—

紅土桶—北極門の遺棄死体—

紅土桶—北極門の遺棄死体—

紅土桶—北極門の遺棄死体—

紅土桶—北極門の遺棄死体—

紅土桶—北極門の遺棄死体—

紅土桶—北極門の遺棄死体—

紅土桶—北極門の遺棄死体—

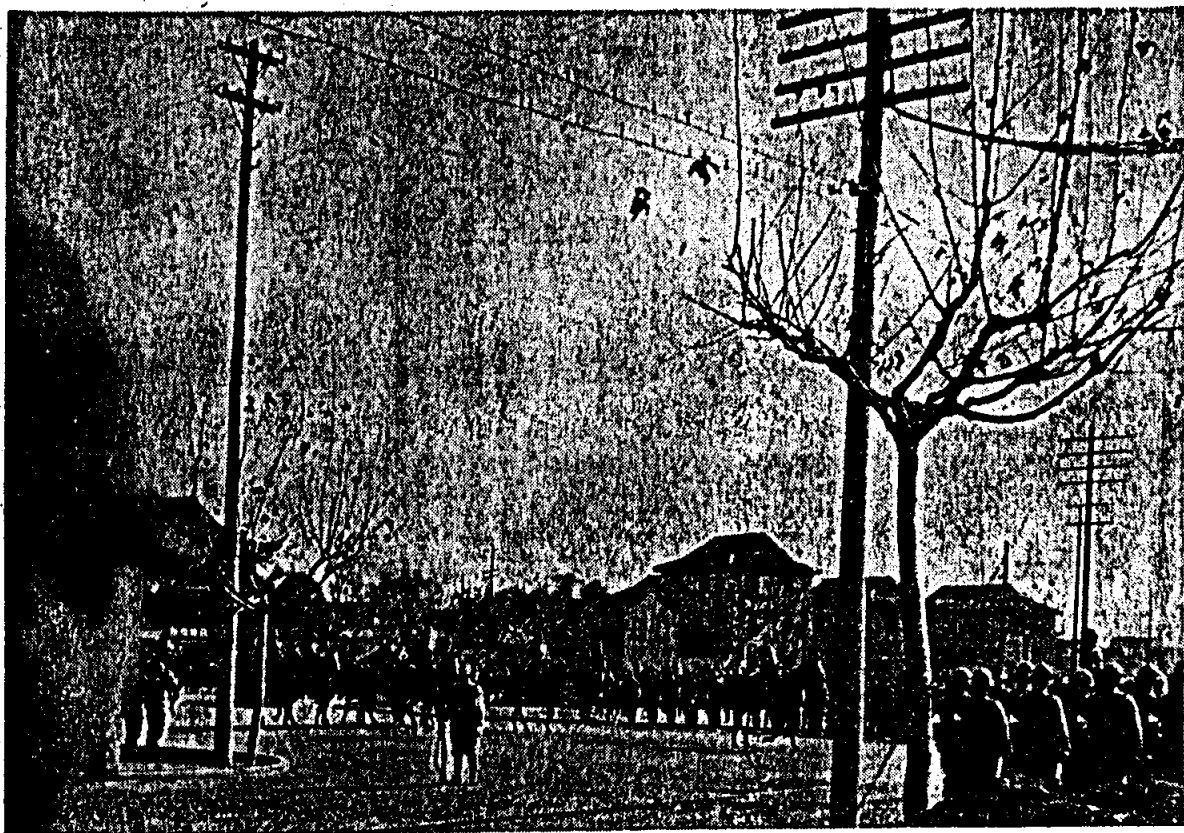
紅土桶—北極門の遺棄死体—

紅土桶—北極門の遺棄死体—

紅土桶—北極門の遺棄死体—

紅土桶—北極門の遺棄死体—

紅土桶—北極門の遺棄死体—



南京入城式 12月17日(晴) 13時半 中山路にて 先頭は松井大将 16師団經理部・金丸吉生氏撮影

を発見した。この鶏鳴寺の岩山を利用して地下に防衛司令部があり、出入口はまるで廟のようである。横からケーブル線が入っているのを、扉を壊して入って発見したわけである。地下に発電機を設え、貯水池があり、教室にわかれて、近くに深い坑道をつくって交換機を備えた通信所があった。支那事変勃発三年前に、ドイツ人技師の指導によってつくられたとのことである。

この高射砲陣地は、完全な電動式高射砲陣地で、当時日本陸軍も装備していなかった高射算定具、四メートル基線測高機二台、37耗機関砲、20耗機関砲等は、すべてドイツ製の最新式のものであった。13年2月、陸軍省の西郷歩兵大尉の案内で、ドイツ軍将校が見学に来たことを覚えてゐる。

(筆者注)

この鶏鳴寺は、玄武湖南側の城内、太平門と玄武門の中間にある。この付近一帯の丘陵(富貴山・九華山・鶏鳴寺・北極閣)地帯は、敗残兵が遁入して日本軍に抵抗し交戦したところである。

中国側埋葬隊の記録によると、太平門―富貴山地区の遺棄死体六四八という。その数はともかく、この地区で敗残兵が掃蕩されたことは確かである。

▼新井敏治氏の証言(歩兵第三十八聯隊第一中隊軍曹 現住所・奈良県高市郡高取町清水谷六一〇)

― 下関の漂着死体の処理 ―

私は、当時歩兵第三十八聯隊(奈良)第一中隊、陸軍軍曹として南京戦に参加しました。しかし、11月24日無錫にて負傷して上海に後送され、12月13日退院し、幸運にも野戦貨物廠の自動車に便乗して、15日南京の所属隊に帰りました。したがって12月13日の入城の体験は持って居りません。

歩兵第三十八聯隊は奈良県出身者にて構成され、当時の従軍者が今なお残っています。昨年の私共の会合(小さな三〇人の集まり)でも教科書問題に驚き、真実を伝えるべく委

員を選び、地方新聞に交渉しましたが、今に至るまで何の連絡もありません。

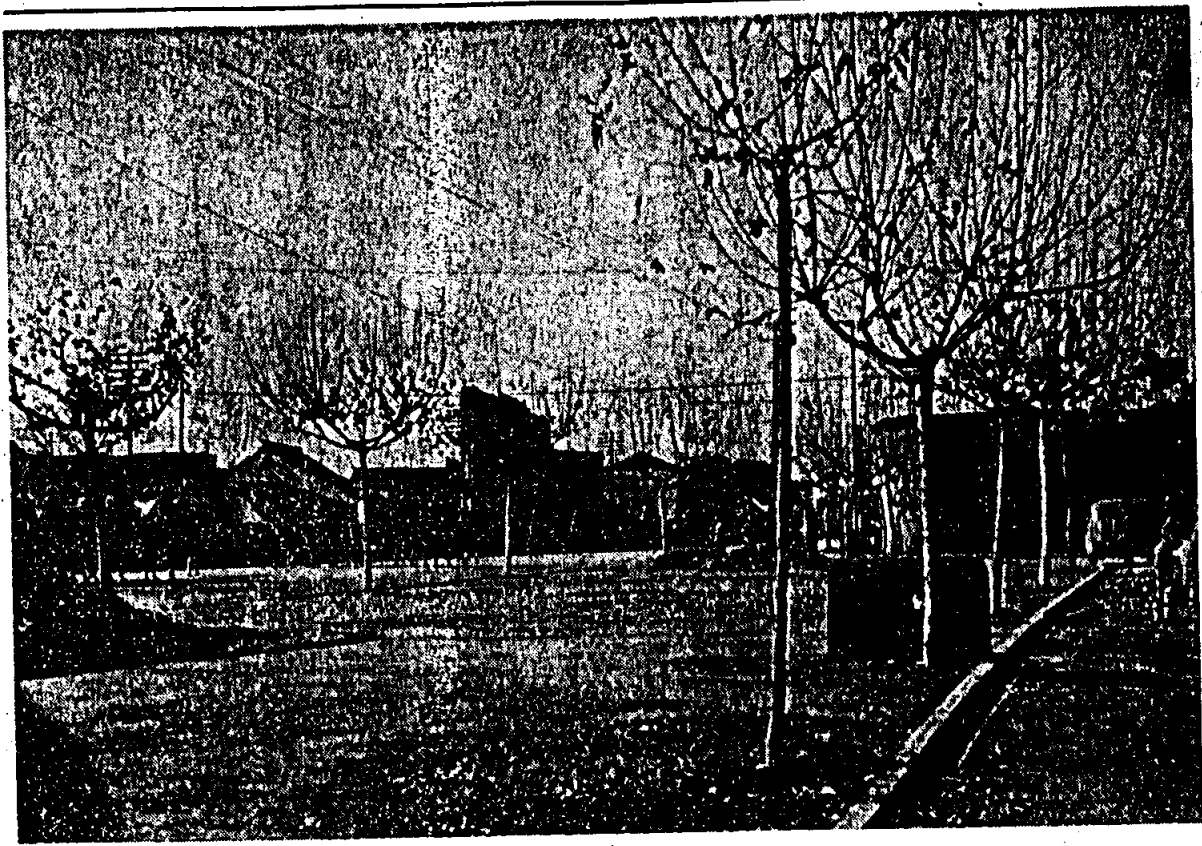
聯隊の編成は三二〇〇余人でしたが、南京入城当時の中隊陣中日誌には、中隊は八〇名くらいと記されていたと思ひますので、聯隊全体としては一五〇〇名以内、師団合計五〇〇〇名以下、南京攻撃は六ヶ師団ですから二万五千―三万くらい、城内に入ったのは敵しく統制され、三〇〇〇人くらいと思ひます。13日の日記に誌された中隊射撃は0です。交戦していません、私は兵器掛で、今でも記憶があります。

(中略)

12月19日か20日ごろ、清掃処理のため兵十数人を連れて下関の揚子江岸に行きました。流れの關係で下関に漂着した死体を押し流す作業でした。死体は三〇〇以上。

この漂着死体は12月12日、南京上流蕪湖に進出したわが軍に砲撃された退却中の中国兵の漂着死体と思ふ。傷(日時の経過により断言できないが)より判断すれば、中国軍は相当混乱し、船にとりすがる遭難者を振り切つて逃走(頭部受傷、手首なき人)したものと考へる。子供は見当たらず、女は二、三見えた。民間服の人もあった。兵士は下級者が多かった。いずれも相当水膨れしていた。陸上には死体はなかった。

南京の宿舎は、鉄道部横の大きな建物、城内は整然としており、戦いの跡はなかった。戦災の甚しかった無錫・常州等の市街を見て来た目には奇異に感じた。もちろん死体などはなく街を歩く兵士たちも帯剣のみ、中隊本部も合營歩哨だけで臨戦態勢はとっていない。入城の翌日、中隊一番乗りの和平門に行き写真を撮り、玄武湖を見て帰った。(筆者注) 新井氏は、「漂着死体は上流の蕪湖方面から流れてきたもの」と推定しているが、平井秋雄氏も「13日―14日、江上の筏や浮遊物に乗っていた敵は、揚子江の中間を流れていたの下関からのものではなく、上流(新河鎮?)から押し流されたものであろう」と述べている。



南京入城式 同じく、報道班立入禁止地点から金丸氏が撮影したもの(スーパーシクス使用)

▼佐々木元勝氏の野戦郵便長日記 (上海派遣軍司令部郵便長、札幌郵便局長現住所・東京都世田谷区赤堤五―三六一四)

(注) 佐々木元勝氏は軍の野戦郵便長として従軍し、12月15日上海出発、書記以下兵十六名がトラック三台に乗り、太倉―常熟―無錫―常州―丹陽―句容―南京道を前進し、16日南京に入城した。この間の戦場の情景を日記に誌している。既に若干引用したが、16日、17日の日記をまとめて引用する。

佐々木氏の資料は、12月16日、17日と南京攻略戦から若干の時日を隔て、多くの伝聞推測を交えてはいるが、当時現場にあって、惨烈なる戦闘後の戦場の実相を見聞した人によるつぶさな記録として、その資料的価値は高く、遺憾ながらこの日記に記録されているようないくつかの不法行為があったであろうことは認めざるを得ない。

12月16日、快晴、風

湯水鎮の軍司令部に立ち寄り、中川君に会い、敗残兵との一戦の危ない話を聞き、勇躍トラック四台、先を争って南京に向う。麒麟門から少し先の工〇試験所の広場に、苦力みたいな青服の群が蹲っている。武装解除された四千の兵である。

(注・第六師団参謀長中沢三夫氏の証言の俘虜と同一のものであるが、この俘虜は南京に護送収容された。)

瞬く間に南京の大城壁に到り、中山門を入る。……軍政部の前通りから数丁の間、真に驚くべき兵の殲滅が行われたらしく、死体は殆んど片付けられているが、鉄兜や衣服が狼藉を極めている。ここで二、三万の兵が、一時に掃射されたものであろう。火災の未だ燃えている家がある。(注・この目撃記が「大虐殺」の根拠とされているが、狼藉の跡を見ての想像である。13日、真つ先に入城した歩兵第二十聯隊、第七聯隊の証言を

みても、否定的である。中国軍が狼狽して敗走した跡である。)

夕日が沈まんとする頃、トラックを走らせ揚子江河岸停車場近傍の郵政局に向う。こゝは上海の開北の如く荒れている。揚子江河岸にも支那兵の殺された無数の跡があり、駆逐艦が浮んでいる。新局舎の前には、軍帽を被った支那兵(士官)が脚から腹の方を宛かれ、まだ燃えている。壊れた煉瓦の上では、少し前殺されたらしい中老の死体が、口と鼻から血を出して倒れている。……

麒麟門で敗残兵との一戦では、馬群の弾薬集積所で五名の兵が、武装解除した二百人の後手に縛り、昼の一時頃から一人づつ銃剣で突刺した。……夕方頃、自分で通った時は二百人は既に埋められ、一本の墓標が立てられてあった。

南京で俘虜は四万二千とか。揚子江河岸からの帰り、続々と夥しい行列をなして兵に連れられて行く。苦力の大群(俘虜)は三組あり、警戒の兵にトラックの窓から聞くと、皆殺してしまうのだと答えた。便衣に変装して避難しているのを、一網打尽にされたので、日の丸の腕章をつけたのが多く、十五、六歳の給仕みたくのもいた。月が蒼白くのぼり、此宵一夜の命の俘虜の群は、歴史の悲劇に違いない。……碼頭の局に行つた運転手の兵等が、大分遅くなってからドヤドヤ帰ってきたが、碼頭で二千名の俘虜を銃殺したという話。手を縛り、河に追い込み銃で射ち殺す。逃げようとするのは機関銃でやる。三人四人づつ追い立て、刺しても斬っても御自由というわけで、運転手の兵も十五名は撃つたという。

(注・16日夜、下関碼頭で俘虜二千名を銃殺したという話)これは、第三艦隊軍面家住谷盤根氏(後掲)の証言、15日夜大量に銃殺されたという今井正剛氏の証言あるいは梁廷芳大尉の五千人数書談と、何らかの關係があるように思う。

住谷氏の目撃日時は明記されていないが、入城式の前日といい、人数が約二千人とい

うから、同一の事件であるかも知れない。

馬群で女俘虜殺害の話

これは吉川君が突見したのであるが、わが兵七名と最初暫く応射し、一人(女)が白旗を振り、意気地なくも弾薬集積所に護送されて来た。女俘虜は興奮もせず、泣きもせず、まったく平然としていた。服装検査の時、髪が長いので「女だ」ということになり、探せば立たされた、皆が写真を撮った。途中で可愛相だというので、オーバーを着せてやった。殺す時は、全部背後から刺し、二度突刺して殺した。俘虜の中に朝鮮人が一名、ワイワイと哀号を叫んだ。俘虜の中三人は水溜りに自から飛び込み、射殺された。

12月17日 快晴

朝方、上海兵站部の兵が、年寄りの支那人を射殺した。この支那人は、どこをどう間違えたのか、入場式のある街近くに来て、警備の兵に捕えられ、ウオーウオーと盛んに弁明する。一旦釈放され帰りにかけたが、引き戻されて防空壕に連れ込まれ、銃声一発、二発射殺された。近くの宿舎の歩哨に補助警兵が二人立っていたが、何とも云わない。殺された支那人が馬鹿で、不運なのである。

トトラックを走らせて、揚子江河岸に行く。昨夕、軍政部前の通りに散乱していた青色の軍服等は、一斉掃射を浴びた跡と見えて、血が流れていないから、ここで一、二万の兵が集合し、便衣に着換えるため、算を乱したとも思われる。(注：この目撃記が「大虐殺」の証拠とされている。実は中国兵があわてて便衣に着換えて放棄した軍服散乱の跡である。)

野戦郵便局の前を素通りして、揚子江岸に出ると、ここで人類最大の悲劇に直面した。昨夜銃殺した俘虜は二千名余で、道路の一方の空地に縛っておき、四人づつ石畳の河岸に追い出し、支那銃で射ちまくり、逃げるのは機関銃でやり、江上には駆逐艦が居て照明をした。二箇所で、どしどし大量虐殺が行われたのである。(注：昨夜の事件を想像しての記載であろう。)

道路近くでは石油をかけられたのであり、黒焦げになり焦っている。波打際には血を流し、屍体が累々と横たわっている。波打際の死体と並んでいる一人が、こちらを向き眼を開け、睨んでいる。兵站部の兵が道路の欄から撃つ。一発命中したが死なぬ。次の一発は水にあたる。目を見開いて呪わしげにこちらを見る。さらに一発、両手をぐらうと伸ばして絶命。抗日は呪日であつたらう。

兵站部の兵二名と他の兵一名が、河岸に下り立って余喘のあるらしいのを撃つ。向うの箇所でも他部隊の兵が、道から拳銃で撃つていた。……トトラックを引返し、入城式に向う。(入城式の状況記述、省略) 式は二時から一時間半ぐらいで終り、トトラックで中山陵に向う。……中山陵近くの松林で青竜刀を持った一人の兵士が、敗残兵一人を背後に縛り(斬首の光景が述べられていくが省略)。

夕靄に烟る頃、中山門に入る前、また武装解除された支那兵の大群に遇う。乞食の行列である。誰一人可憐なのは居ない。七千二百名とかで、一挙に殺す名案を考究中だと、引率の将校がトトラックの端に立乗りした時に話した。船に乗せ片付けようと思ふのだが、船がない。暫らく警察署に留置し、餓死さすのだとか……。

(注)佐々木氏が16日、麒麟門近で見た約四千の俘虜が、17日の入城式後に南京に護送されたものか、あるいは別の俘虜であるか不明である。人数の七千二百名は仙鶴門鎮(堯化門)の歩三八の俘虜数と一致するが、澄田氏の証言によると、約二、三千人といひ、どうも人数が一致しない。

元上海派遣軍参謀榎原主計氏が「16、17日頃、俘虜を南京刑務所に収容した」(後掲)と述べているので、この俘虜の護送光景であろう。17日の入城式以後は、大量の俘虜処分の話は聞かない。(未完) <訂正> 「偕行」11月号9ページ下段中央「48期沢田正久氏」とありますのは「48期」の誤りです。

医療余録

請求明細書

59期 大村 俊雄

事業に請求書はつきもの。私共の関係では、薬問屋や医療器械屋などから請求書が送られてくる。例えば買った薬、A、B、C、D……単価いくら、購入量いくら、合計して今月分いくら、内訳として明細書が何枚かつてくる。しかし私共開業医が毎月提出する請求明細書のように、五百枚とか千枚とかいう膨大なものは他の業種にはあるまい。ご存知のとおり患者一人につき一枚の明細書(治療内容)が要る。たまたまなく面倒ではあるが諦めて永年やってきました。おまけに、この明細書であるが、少し前までは社会保険の本人用として白い紙に黒字、家族用は赤字、国民保険用として青字と三種類の明細書用紙があつた。やがて老人が無料となつて、社保と国保に老人用の用紙ができ都合五種類となつた。そして更に今年2月から、老人保健法が施行され、以後月末から月初めの請求の時期には、甚だコンガラガッタことに相成つた。つまり東京の場合を例にとると、まず社保本人の黒字、社保家族の赤字、国保の青字、これは従来どおりだが、その他に65歳〜70歳未満は社保が空色に赤字、国保がピンクに黒字、70歳以上の老人には社保がウグイス色に黒い字、国保がセピアに茶色と、都合七種類の用紙を使い分けなければならぬ。間違えれば送り返されてくるので、月遅れで請求の仕直し。七色の紙が入り乱れて、幼い頃遊んだ折り紙のよう、何ともいえない情ない思い。

スマートラ島パレンバン。女子収容所に勤務した人わかる

10月号51頁に標記の尋ね人記事がのつた。読売新聞10月21日・おあしす欄に、次のような対面の様子で報ぜられている。
「米米映画会社社員で来日中のバーバラ・エッシュナーさんは、当時の収容所関係者を捜し求めていた(先月29日付本欄既報)がこのほどその一人と東京で再会した。

この人は同収容所の軍医山田公彦さん65歳(宮城県・柴田町)である。映画づくりに協力できるならと話はずむ。「無理やり親子と引き離された人たちがばかりで、同情こそすれ憎しみはなかつた」としんみり語る。エッシュナーさんは、山田さんの調査でわかった元上等兵の金子定治さん63歳(埼玉県・行田市)とも近く面会する。V

事務局からご報告まで



12月の月例参拝は偶数期と各部
12月19日(第三水曜日) 13時30分、到着殿集合